

萬葉集卷十六考

瀬古, 確

<https://doi.org/10.15017/10581>

出版情報 : 九大國文學. 1, pp.99-114, 1931-09-01. 九大國文學研究會
バージョン :
権利関係 :

萬葉集卷十六考

瀨古確

遠の朝廷の長官にして大伴旅人が不知火の筑紫に下れば太宰府を中心とする多くの歌が見られるけれども、間もなく老帥の上京と共に華やかになりし筑紫歌壇の消息も遽に絶えて再び都の歌界の賑を見るのである。

更に貴公子家持の雪深き越路の任に赴くに及んでは歌壇の中心は都を離れて遠く越中の國府に移つたかの觀を舌し、再び都の様子の明かになるのは彼が少納言に任ぜられて幾年か此處に住居した越の地を去つてからの事である。

或ひは集中仇守る筑紫に下る防人等の幼い歎きの見えるのも亦、家持の兵部少輔としてその事に當つたのによるものなるを思へば、萬葉集の如何に大伴家ミ密切な關係を有してゐるかを推察するに難くないであらう。

萬葉集二十卷の中には勿論大伴氏の編纂に成つたものには思はれない卷もあつて一概には之を言ふ事は出来ないけれども、その多くは家持の手を経てゐるものなる事は種々の方面から之を證する事が出来る。

この稿に於ては特に卷十六の性質を考へ併せてその編纂者を推定してみたいと思ふのである。

二

卷十六は有由縁并雜歌を集めたものとして集中特殊な卷を形式してゐるけれども、その何れの歌も製作年月の不明である。ここはこの卷の性質を考察する上に甚だ困難を感じしめるものである。

先づこの卷に見える地名を覗ふに略大和を中心として順次地方に及んでゐて、ここにも編者の手の加つてゐる事を見逃すことは出来ぬ。更に之を國別に纏めてみれば即ち次の如くである。

大和では

〔三七八八〕無耳の池

〔三七九一〕飛鳥

〔三八一九〕春日野

〔三八三五〕勝間田の池

〔三八三六〕奈良山

〔三八八五〕平群山

〔三八八六〕飛鳥 置勿 桃花鳥野

攝津では

〔三七九一〕住吉の遠里小野

〔三八〇一〕住吉の岸野

〔三八〇八〕住吉

〔三八八六〕難波の小江

常陸では

〔三八〇六〕小泊瀨山

陸奥では

〔三八〇七〕安積香山

能登では

〔三八七八〕〔三八七九〕熊來

〔三八八〇〕加島嶺

越中では

〔三八七〇〕粉漣の海

〔三八八一〕大野路

〔三八八二〕澁溪の二上山

〔八八八三〕〔三八八四〕伊夜彦

長門では

〔三八七二〕角島

豊前では

〔三八七六〕企玖の池

筑前では

〔三八六二〕〔三八六三〕〔三八六九〕志賀

〔三八六六〕〔三八六七〕也良の埜

なきてある。この統計に於て比較的地方のものが多いのは所謂有由縁并雜歌を廣く他に求めた事によるものと思はれるが殊に大和の地名の飛鳥地方を中心としてゐる事はこの卷に相當古い歌の含まれてゐる事を證據立てるものと言はねばならぬ。更に乞食者の詠に

〔三八八六〕(上略) 今日今日跡飛鳥爾到雖立置勿爾到雖不策都久怒爾到東中門甲參納來豆命受例姿(下略)

こみえるのは、明かに飛鳥地方に皇居のあつた時代の作である事を物語るものであつて、少くとも元明天皇の和銅三年より以往のものなる事を知る事が出来る。

三

ついでこの卷の類歌を検するに七・十・十一・十二なごの卷に之を見出す事が出来る。即ち

〔三七九一〕(上略) 墨江之遠里小野之眞榛持丹穗之爲衣丹(下略)

には幽かながらも、卷七の

〔二一五六〕 住吉之遠里小野之眞榛以須禮流衣乃盛過去

の影を認める事ができ、

〔三八一四〕 眞珠者緒絶爲爾伎登聞之故爾其猪復貫吾玉爾將爲

にも同じく卷七の

〔一三二六〕 照左豆我手爾經古須玉毛欲得其緒者替而吾玉爾將爲

と一脈相通ふものがある。或ひは

〔三八〇三〕 隱耳戀者辛苦山葉從出來月之顯者如何

には卷十の

〔一九九二〕 隱耳戀者苦罹麥之花爾開出與朝且將見

なる歌の色彩がみえ、殊に小綱王が宴居うちぢの日琴を取る毎に必ず吟詠したといふ

〔三八一九〕 暮立之雨打零者春日野之草花之末乃白露於母保遊

なる歌は確かに卷十の

〔二二六九〕 暮立之雨落每一云打零者春日野之尾花之上乃白露所念

の歌の吟誦の間に少しく變化していつたものと思へられるのである。猶河村王の愛誦した

〔三八一八〕 朝霞香火屋之下乃鳴川津之努比管有常將告兒毛欲得

の歌も卷十一の

〔二二六五〕 朝霞鹿火屋之下爾鳴蝦聲谷聞者吾將戀八方

なる歌の影響を多分に受けてゐるものと思ふ。更にまた

〔三八〇四〕 如是耳爾有家流物乎猪名川之奥乎深目而吾念有來

には卷十二の

〔二九六四〕 如是耳在家流君乎衣爾有者下毛將著跡吾念有家留

と似通つた點のある事を見逃す事は出来ないであらう。

かくの如く卷十六には七・十・十一・十二などの歌の影響のあるこゝを認めねばならないと同時に、これらの卷々よりも後れて編纂せられたものなる事を知るに難くないのである。

七・十三の兩卷は古歌集及び人麿歌集出のもの多し事によつても、同様な技巧を用ひた歌のあるのによつても、或ひ

は又その分類法の似寄つてゐるのによつても略同じ時代の作品を集めたものの如く、即ち古くは人麿黑人時代から新しくは旅人金村の時代まで恐らく天平初年頃までの作品を収めてゐるものと考へられるのである。更に卷十一・十二の兩卷は古今相聞往來歌類上下ミして分類せられてをり、併も卷十七にみえる古歌なる言葉が餘り遠い以前を指すものでないのを思へば、たゞへ一時に編纂せられたものでなくとも、この兩卷にも亦相當新しい歌を含んでゐるものと見られるであらう。即ち七・十・十一・十二なごの卷には勿論古い歌も載せられてゐるけれども普通に考へられるよりも比較的新しい歌、換言すれば天平初期頃までの作品をも収めてゐるのを思へば、十六の卷にも新しくは天平も餘程下る作品を収録してゐるのではないかと推察せられるのである。

四

卷中製作年代の明記してあるものは一首もないけれども、作者若くは吟詠者の名を記したものはかなり多くを教へる事が出来る。これによつてその年代を推察する事もかゝる卷を考察するにあつては、一つの重要な役割を演ずる事になるであらう。

〔三八一六〕家爾有之權爾鑊刺藏而師戀乃奴之束見懸而

なる歌を好んで誦せられた穗積親王は靈龜元年七月に薨せられたのを思へば、この歌は少くとも靈龜元年以前のものと見てはならぬ。

〔三八三三〕虎爾乘古屋乎越而青淵爾鮫龍取將來劍刀毛我

なる詠歌種物歌の作者境部王は養老年間に治部卿ミなつた記事が見え、懷風藻にも治部卿境部王ミして二首の詩を収録せられてゐるのを思へば、この歌も亦養老前後の作ミみられるであらう。

また行文大夫は養老神龜の頃にかけて續紀にその名が見え、懷風藻にもその詩を収められてゐる博士であつて、謗佞人歌一首もこの頃のものではないか推察せられる。更に

〔三八二四〕 刺名倍爾湯和可世子等襟津乃檜橋從來武狐爾安牟佐武

〔三八二五〕 食薦敷臺菁煮將來樛爾行騰懸而息此公

なごの明い遊戯的な作品を留めてゐる長忌寸意吉麻呂は、太寶二年持統天皇の參河國に幸せる時には高市連黑人等と共に駕に従つて

〔五七〕 引馬野爾仁保布襟原入亂衣爾保波勢多鼻能知師爾

なる歌を詠じ、或ひは盤代の結松を見ては

〔一四四〕 盤代乃野中爾立有結松情毛不解古所念

ミ有間皇子の悲劇の跡を慕ばないでは居られなかつたのを思へば、高市連黑人ミ同時代、即ち萬葉前期に生活した人である事は明かである。此等の人の名の見えるのによつても、十六の卷に古い時代の歌の含まれてゐる事を證據立てる事が出来るであらう。

併しながらこの卷には比較的新しい作品をも含んでゐるものなる事は、又その作者名より推察する事が出来ると思ふ。即ち

〔三八四四〕 烏玉之妻太乃大黒每見巨勢乃小黒之所念可聞

ミ唄り歌つた土師宿禰水通は天平二年正月十三日帥の邸に於て催された梅花の宴にその名を連ねてゐるのによつても天平の人である事は明かである。

或ひは夢の裡に作つて友に贈つたといふ

〔三八四八〕 荒城田乃子師田乃稻乎倉爾舉藏而阿奈于稻于稻志吾戀良久者

なる歌の作者忌部首黒麻呂は續紀によれば、孝謙天皇の寶字二年より寶字六年の條にその名が見えてゐて萬葉末期に生存した人である事は疑ふべくもないのである。或ひはまた

〔三八四〇〕 寺寺之女餓鬼申久大神乃男餓鬼被給而其子將播

と嗤り笑つた池田朝臣に負けてゐず

〔三八四一〕 佛造眞朱不足者水滄池田乃阿曾我鼻上乎穿禮

と巧に應酬した大神朝臣奥守は天平寶字八年正月從五位下を授けられてゐるのをみれば、また明かに萬葉末期に生存してゐた人と言ふ事が出来る。

更に注目すべきは嘖喉瘦人歌二首の作者として大伴宿禰家持の名のみえる事である。家持の歌で集中年代の最も古いものは八の卷に收められてゐる天平八年九月作の秋歌四首である。ついで十年七月七日の獨仰天漢聊述懷歌は卷十七に載せられてをり、同年十月十七日の橘朝臣奈良麿結集宴歌には彼の名も見えて卷八に收められてゐる。更に十一年六月には悲傷亡妾歌を卷三に留めてをり、同年八月姑坂上郎女の竹田庄を訪れた際の歌はまた卷八に載録せられてゐる。猶十二年十月の内舍人としての彼の歌は卷六に見えるのである。

家持の歌を眺めてみても解る如く三・六・八なきの卷は略同時代の歌を收録してゐるのであつて、その最新歌は何れも天平十五六年である。

而して卷十六には家持をはじめ明かに萬葉末期に生存した人の名のみえるのによつても、この卷には少くとも聖武天皇の天平中期頃までの作品を收めてゐるもののみねばならないと思ふ。

かくて人名より考察するに十六の卷には古くは持統天皇の頃より、新しくは聖武天皇の天平中期頃までの歌を載録して

るるものの如く、略三・六・八の卷に同じやうな年代に渡つて作品を収めてゐるのではないかと考へられるのである。

五

卷十六の編者を推定するに當つては、その左註を考察するのが便利であると思ふ。即ち

「三八〇三」隱耳戀者辛苦山葉從出來月之顯者如何の歌に

右或曰男有答歌者未得探求也

とあるのは卷十八の越前國拯大伴宿禰池主來贈戲歌四首の左註

右歌之返報歌者脫漏不得探求也

なる家持の筆附を思はせるものがある。更に娘子臥聞夫君之歌從枕舉頭應聲和歌一首の左註に

今案此歌其夫被使既經累載而當還時雪落之冬也因斯娘子作此沫雪之句歟

とあるのはその語句の説明をしてゐる點において卷十七以下にみえる

二日應立夏節故謂之明日將暄也(卷十八)

(上略)但越中風土梅花柳絮三月初咲耳(卷十九)

右一首長谷攀花提壺到來因是大伴宿禰家持作此歌和之(卷二十)

なごの家持の註を聯想するこゝが出来る。猶啜咲瘦人歌二首の註に

右有吉連老字石麻呂所謂仁教之子也其老爲人身體甚瘦雖多喫飲形似飢饉因是大伴宿禰家持聊作斯歌以爲戲咲也

とあるのは瘦身の家持から笑はれた吉田連石麻呂のいたく瘦せてゐた事が覗はれるばかりでなく、この註も亦家持によつ

て加へられたのではないか。考へられるのである。かくて右歌者傳云。こあるのも家持の手になつたのではないか。推察するのにも餘り無理ではないであらう。

更に佐爲王近習の婢の作、戀夫君歌一首の左註に

(上略) 於是當宿之夜之夢裡相見覺寤探抱曾無觸手 (下略)

こあるのには

少時坐睡則夢見十娘驚覺攪之忽然空手

なる遊仙窟の陰影を見逃すこは出來ないであらう。而して坂上大嬢に贈つた家持の歌十五首の中四首までも仙遊窟の影響を受けてゐるのを思ひ、殊にその第一首に

〔七四一〕 夢之相者苦有家里覺而搔探友手二毛不所觸者

こあるのを見れば、また卷十六の左註をものした人の大伴家持なる事を推察する事が出來ると思ふ。

古い歌を輯め新しい歌をも收めて詳細な左註を施し、この一卷したのは歌の輯集に熱心であつた家持を措いて他に求められないであらう。

六

以上の考察によつて自ら明かな如く卷十六には古くは持統天皇の藤原宮の頃より新しくは聖武天皇の天平中期頃までの作品を收めてゐるもの如くである。

古い作品の載せられてゐる事はその地名若くは作者名より之を證する事が出來るのであるが、更にこの卷には

〔三八八〇〕 (上略) 母爾奉都也目豆兒乃負父爾獻都也身女兒乃負

〔三八八五〕（上略）耆矣奴吾身一爾七重花佐久八重花生跡白賞尼白賞尼

〔三八八六〕（上略）陶人乃所作瓶乎今日往明日取持來吾目良爾鹽漆給時賞毛時賞毛

なごの如く歌ふ歌ミしての要素を多分にもつてゐるもの有るのによつても、古い歌の含まれてゐる事は容易に察知せられるであらう。猶その作者の中には明かに萬葉末期に生存してゐた人の見えるのによつてもこの巻には少くも新しくは天平中期頃の作品をも収めてゐるものミみられるであらう。

更にこの巻の歌ミ相通ふものを含む七・十・十一・十二なごの巻々には古い歌も含まれてゐるけれども、新しくは天平初期頃迄の歌をも含んでゐるのを思へば、この巻には天平も餘程下る年代の作品をも載せてゐるものミ考へられるのである。

前に述べた如く家持の歌の同じ年代のものが三・六・八なごの巻々に散在してゐるのによつても、これらの巻々は同時代のものを併行して輯めてゐる事を覗ふ事が出来るのであるが、この事は更にこれらの巻々の歌を年代順に配列してみれば一層明瞭に領かれるミ思ふ。その例として天平中期より後期にかけての作品の如何に配列せられてゐるかを示せば次の如くである。

（一、左の表に於て巻別配列表の相隣る點を直線を以て各々聯接せられたし）

天皇皇紀	年月日	題	詞	作者	巻別配列表	種別及數	大國歌
聖武	一三五七	悲嘆尼理願死去作歌		大伴坂上郎女	1	短歌	1
	一三五七	幸子芳野離宮之時應詔作歌		山部宿禰赤人	5	長歌	1
	一三九六	遺新羅國之時使人等各悲別贈答及海路上勵情					
	八六	陳思作歌並當所誦詠之古歌					
秋歌				大伴宿禰家持			
					4		137
							5
							3
					1566		3578
					1005		1005
					460		460

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
又別所心歌	越中守大伴家持報歌	掾久米朝臣廣繩之館宴歌	掾久米廣繩之館饗田邊福鷹宴歌	至水瀨遊覽之時各述懷作歌	往布勢水海道中馬上口號	左大臣橘家之使者造酒司令史田邊福鷹饗于守大伴家持館爰作新作并便誦古詠各述心緒	越中國守大伴家持報贈歌	越前國掾大伴池主來贈歌	大伴家持作歌	思放逸應夢見感悅作歌	掾大伴池主報贈歌	入京漸近悲情難撥述懷贈大伴池主歌	敬和立山歌	立山歌	同日守大伴家持館飲宴歌	歌	掾大伴宿禰池主之館餞稅帳使守家持宴歌并古	敬和遊覽布勢水海歌	大伴宿禰池主
〃	大伴宿禰家持	能登乙美 大伴家持・土師・	田邊福鷹・大伴家持・久米廣繩・大伴家持	田邊福鷹・大伴家持・久米廣繩・土師	大伴宿禰家持	大伴宿禰家持	大伴宿禰家持	大伴宿禰池主	〃	大伴宿禰家持	大伴宿禰池主	大伴宿禰家持	大伴宿禰池主	〃	大伴宿禰家持	大伴家持・內藏繩鷹・石川水通	大伴宿禰池主	大伴宿禰池主	
1	2	4	4	6	2	12	4	3	4	4	2	1	2	2	1	4	1	1	
										1	1	1	1	1					
4084	4082	4066	4052	4046	4044	4032	4076	4073	4017	4011	4008	4006	4003	4000	3999	3995	3993		

かくの如く天平八年より十六年にいたる九年間に於て右の表の高低の殊に甚しいのミ、更にこれらの卷に天平十七年以後の作の見えないのミを思ひ合せれば三・六・八なごの卷々は各平行して歌を輯集せられたもの如く、十六年頃を境として整理せられたものなる事を推測するに難くないであらう。

既に種々の方面から考察したのによつて明かな如く卷十六は略三・六・八なごの卷と同時代の作品を収めてゐるものなるを思へば、又これらの卷々と同じく天平十六年頃を境として一度纏められたもの如く、卷十七に接する比較的新しい作品をも含んだ卷であつて、その編者は左註より考へるに大伴家持ではないかミ推察せられるのである。即ちこの卷の左註に十七以下の卷々に於けるミ同様な手法を存する事によつても、この卷の編者は大伴家持ではないかミ推察せられるのである。更にその左註の中には遊仙窟の影響ミ思はれるものもあるが、家持の坂上大嬢に贈つた歌には十五の中四首までも遊仙窟の色彩を帯びてをり、殊にその第一首の如きはこの卷の左註ミ全く同じ趣向であるの見れば卷十六の編者ミして大伴家持を推すミは餘り無理ではないであらう。

因にこの年表に於て天平十六年迄は甚しい高低を示してゐるけれども、十八年以後は順次徐ろに低まつていつてゐるのを見れば卷十六以前の卷々は略十六年前後に一度整理せられたものではないかミ類推せられるのである。この事はまた十七以下の四卷に見えるそれ以前の卷々の陰影によつても證する事が出来るであらう。(昭和六・六・六稿)